



学級全員
のための

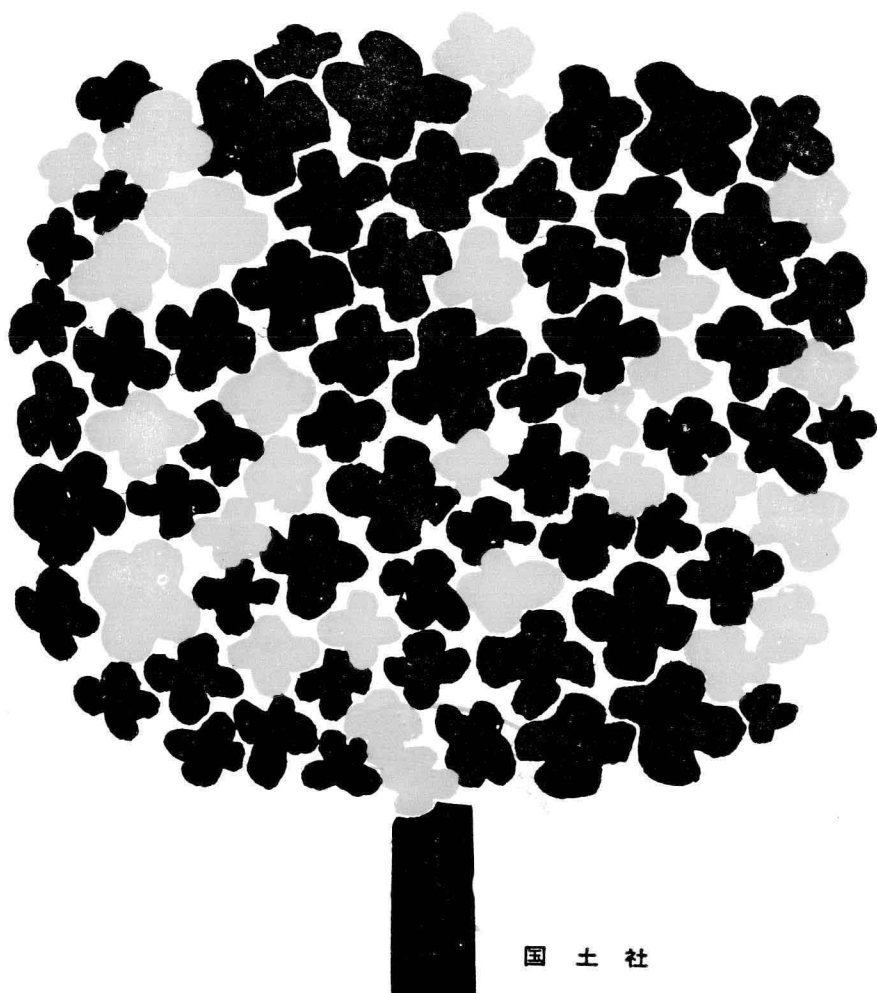
学校劇選集

上級

日本演劇教育連盟編

●学級全員のための
学校劇選集

《上 級》



国 土 社

912		
	日	本演劇教育連盟 学級全員の ための学校劇選集(上級) 国土社 昭和43 224P 22cm ○

1960年9月20日 初版発行 ©
 1968年1月10日 9版発行

編者との
 了解で検
 印を廃す

定価 450 円

編者 日本演劇教育連盟

発行人 長 宗 泰 造

印刷所 株式会社 厚 徳 社

発行所 株式会社 国 土 社

学級全員のための
 学校劇選集
 <上 級>

東京都文京区目白台1-17-6
 振替・東京 90631 番
 電 話 (943) 3721=代表

まえがき

学校で劇を上演するとき、学級の人たち全員が舞台上立つことになったら、それはすばらしいことではないでしょうか。この本は、そこをねらいとしてつくったものです。

学級全員が出演するということになれば、みんながその劇のために力をあわせることになり、だれひとりぼんやりながめているわけにはいきません。学級全員の人たちの心がしっかりむすびつき、おたがいに力をあわせてはげましあうことがだいじです。それはまた、劇というもの、いちばんたいせつなことでもあるのです。



米 つ くり

小 川 信 夫

【上演時間 20 分】

7

一本のローソク

国 分 一 太 郎

【上演時間 20 分】

23

天ぷらと化けっ葉

粉 川 光 一

【上演時間 20 分】

33

つめなし猫なんかい
こわくない

湯 山 厚

【上演時間 20 分】

45



★ 遠い大むかし、まだ人間が狩りの生活にあげられていたころ。ヒメヒコとナギサは、はじめて米つくりをしたのだが……。

☆ むかし、道におちていた一本のローソク。目なし魚だということになって、大なべに入れて、ぐたぐたとにってしまう……。

★ 彦一とんち話のユーモラスな民話劇。きつねと彦一の化けくらべです。子ぎつね五ひきもくり出して、きつねは大ふんとう。

☆ まんまと、ねずみのちえに、してやられた猫。さあ出ろ、さわげ、つめなし猫なんかいこわくない、とおどりますねずみたち……。

学級全員のための
学 校 劇 選 集

見えない星

宮津博

【上演時間 30 分】

61

ゆけ南極へ

斎田喬

【上演時間 20 分】

75

めざめる日

富田博之

【上演時間 30 分】

89

兎日記

柴田秀雄
荒井たかし

【上演時間 20 分】

103



★ 行夫と道子のきょうだいだが、屋根うらの子どもべやで、テレビを見ていると、とつぜんテレビの中から、青い子かとびだした。

☆ 南極へ行く宗谷丸、もうすぐに見える宗谷丸。子どもたちは小高い丘でそれを待っている。大きな夢をかけて待っている。

★ ぬすみもしないのに、ぬすんだとうたがわれた佐助を、友だちは、だまってみていない。正しいことに力をあわせる美しい姿。

☆ みんなが飼っていたうさぎの世話をすることは、たいへん。あぶなくよそへやられようとしたうさぎも、みんなの相談ですくわれる。

おもちゃの裁判

久保田 万太郎

【上演時間 25 分】

113

おおむの歌

岡 一 太

【上演時間 30 分】

125

黄金の仔牛

金子 緯 一 郎

【上演時間 25 分】

133

うさぎ村の
小うさぎたち

小池 タミ子

【上演時間 30 分】

145



★ おもちゃの国へつれてこられた良太と春子は、王様の前で裁判にかけられる。おもちゃたちが、良太に いじめられたことを申し立てる。

☆ 他人の口まねはうまいが、自分の声で自分の歌というものをうたったことのないおおむが、はじめてそのことをさとする。

★ 百姓たちのだいいな池、その池の水がかれてみんな困っている。その池の中からあらわれた黄金の仔牛、それは百姓たちのすくい主。

☆ いばりやのおおかみが、小うさぎを一匹よこせという。だが、みなし子の黒うさぎをすくうために、小うさぎたちがかつやくする。

怒りの日

落合 聰三郎

【上演時間 25 分】

163

卒業

前橋 栄太郎

【上演時間 20 分】

175

岩と土のあいだ

野上 彰

【上演時間 25 分】

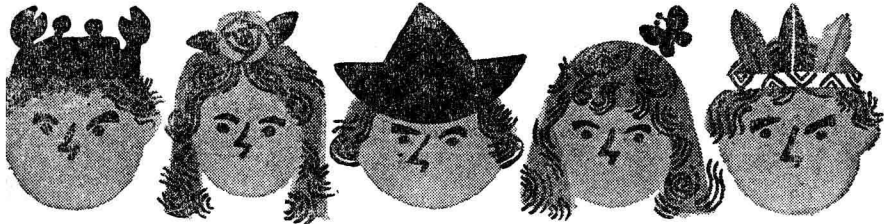
185

上演の手びき

193

「ゆけ南極へ」の設計図

209



★ きょうがさいごという卒業の日に私立学校進学組との差別をうけた子どもたちの怒りがばくはつする。考えさせられる問題の劇。

☆ いろいろの思い出をのこして卒業していく日、いくつかの場面を組みあわせて、その思い出をくりひらけるヴァライティ。

★ 荒れはてた岩山、きれいな泉はきえ、木はかれてしまった。この岩山を、もとのすがたにもどすのだ。希望にみちた野外劇。

楽 譜
あとがき
作品 一覧

222 221 220

編集委員

石原直也 正善達三

漆原喜一郎 高橋昭一

岡部邦三郎 谷川隆二

佐々木博 谷口幸子

装幀 金子国義

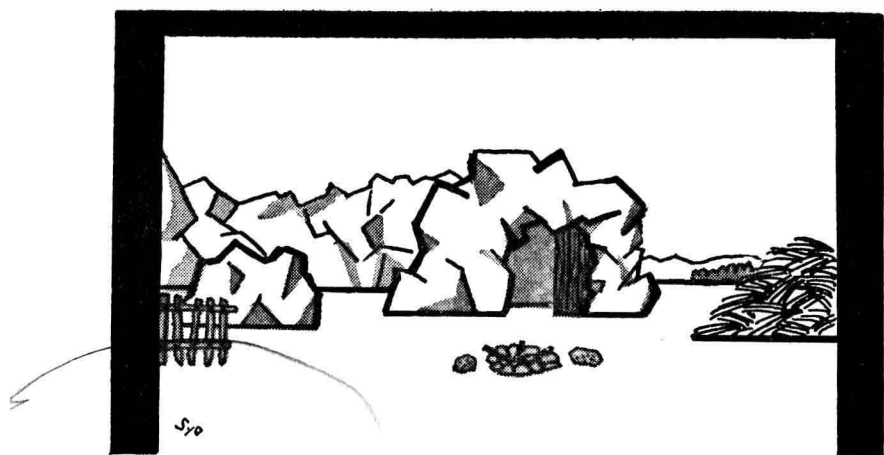
装置図 金子国義

関戸紹作

谷川隆二

こめ
米 つ く り

お がわ のぶ お
小 川 信 夫



でる人

ヒメヒコ（兄）

ナギサ（妹）

カスイ（友人）

ワニヒコ（トナカの長）

トナカのマツリコ（老婆）

イノリのミコ 一・二・三・四

トナカの若者 一・二・三・四・五

とき

遠い大昔、まだ人間が狩の生活にあげてくれたころ。

秋の日の夕方ちかく。

ところ

トナカの部落にほどちかい、野原のちかく、ヒメヒコのすまい。

ぶたい

正面はどうくつをたくみに利用してつくったヒメヒコのすまい。下手の奥にかけて岩。上手奥には乱ざつにつみかさねたワラのぼっち。ぶたいにはみえない

いが下手の奥には米をしまう小さな小屋がある感じ。ぶたい中央に火をもすいろり。全体に岩の感じがよい。

まくがあくと、いろりのちかくでヒメヒコがひとり、石の槌でもみをたたえている。小鳥の声。——上手から、つばをさげたナギサがでてくる。

ナギサ すこしやすんだら？

ヒメヒコ （びっくりしてふりかえる）なんだ、ナギサか……。

ナギサ だれだと思ったの？

ヒメヒコ 部落のものがきたのかと思ったんだ。

ナギサ それだったら、そつとようすをうかがうだけで、わたしたちに声をかける人なんかいないわ。

ヒメヒコ ……うん。……（さみしそうに仕事をはじめる）

ナギサ （元気づけるように）そうそう、いま下の川にいて、きれいな水をくんできただけど、兄さん、

のむ？

ヒメヒコ のむ。……ちょうど水がほしいところだったんだ。

ナギサ じゃもってくる。すぐべつのうつわにいれかえてね……。 (家のなかに退場)

鳥の鳴き声ちかく、羽音とともに下手の岩の上にとまったようす。ヒメヒコ、そっと立つと、家の前にたてかけたヤリをにぎり、鳥にちかづいていく。

家のなかからナギサが小さなうつわをもち登場する。

ナギサ つめたいわよ。

ヒメヒコ (あわてて) シーツ。

ナギサ ……？

羽音がして鳥がとびたつ。

ヒメヒコ チョッ！ にげてしまった。

ナギサ しらなかったの……。

ヒメヒコ まあいいさ。 (ヤリをもとのところへおき) べつに昔のように、目の色をかえてどうしてもとらなきやならないなんてこともないんだ。 (すわって水をのむ) ああ、ほんとにつめたい。 ……

ナギサ いまでは狩のほかに米というたべものが、わたしたちにはあるんですものね。 (ふと) どうして部落の人たちには、こんな便利なたべものがわからないのかしら。

ヒメヒコ いくらいってもむださ。あれだけわたしが部落の者にはなしてまわっても、だれひとりとしてわかってもらえなかったんだ。

ナギサ それどころか、ぎゃくに、部落のおきてをやぶるものだって、こんなところへ追いだしてしまうなんて、考えれば考えるほど腹がたつ。

ヒメヒコ (笑いながら) ここでいくらおこってみたってしょうがないよ。 ……でもねえ、ナギサ、かえってよかったんだ。そうだろう、ここへきたからこそ、ふたりでこの下の野原をきりひらき、そこへ米をつくる

ことができたんだ。

ナギサ そうね、もし、あのまま部落にいたんでは、いつまでたっても米づくりはできなかったわ。

ヒメヒコ (立ちあがって下手をみる) あの小屋のなかには、このヒメヒコのはじめてつくったこがね色の米たばがはいっているんだ。遠い山のむこうにすんでいる人たちがやっていたように、このヒメヒコも、自分のたべものを、この自分の手でつくることができるんだ。

ナギサ まるで夢をみているようだわ、たべものをつくりだすことができたなんて。でも、夢ではないんですものね。この黒い土のなかから、ほんとうにたべものを、わたしたちはつくりだしたんですものね。

このとき、上手からすばやくカスイが登場するが、ワラタバのかけにいったん身をかくす。

カスイ (そっと) ヒメヒコ……。

ヒメヒコ (はっとして) だれだ！

カスイ (そっと顔だけだし) おれだ……カスイだ。

ヒメヒコ どうしたんだ、いったい……？

カスイ その前に、だれか部落のものが、このおれのあとをつけてきてないか、よくみてくれ……。

ヒメヒコは注意ぶかく上手を、ナギサは下手の方をうかがう。

ヒメヒコ べつにこっちの方向には人の影はみえない……

…ナギサ、そっちは……？

ナギサ こっちの方もべつに……。

カスイ (でてくる) それならいいんだ。ここへくるとちゆう、ちよっと部落のものに姿をみられたので、もしかしたらと思ったんだ。

ヒメヒコ そんなにまでしてビクビクしながら、このヒメヒコにあいにくる用事はないはずだ。

カスイ それがあるんだよ、ヒメヒコ。どうしてもヒメヒコにおしえなければならぬ用事があつてきたんだ。

この話のあいだに、ナギサはすばやく足もとのモミをかたづけける。

ヒメヒコ (ナギサに) そのモミは米ごやのなかにしまっておいた方がいい。

ナギサ ええ。

ヒメヒコ それから、そこにおいてある火打ちの石も、すまないけど、かたづけられてくれ。

ナギサ はい。(火打ち石を大事そうにふところにしまいい、モミをいれたツボを手にかけて、下手の米ごやの方に退場する)

ヒメヒコ カスイ、いったい、用事というのはなんのことなのだ……？

カスイ (急に) ヒメヒコ、いますぐ、おぬしたちはここをたつて、どこか部落のものたちにみつからない土地にかくれるのだ。そうしないと、たいへんなことになるぞ。

ヒメヒコ ばかなことをいうな、わたしたちは、せつか

くここに土地をひらいたのだ。それを……。

カスイ ヒメヒコ、トナカの長^{おさ}がかわつたんだ。

ヒメヒコ 長^{おさ}(村長)がかわつた。……じゃイシリベのヒコはどうしたのだ……？

カスイ 死んだ。

ヒメヒコ えっ！

カスイ きのうの狩でカモシカの角^{つる}にやられたんだ。

ヒメヒコ それで、だれだ、だれがなつたのだ、トナカの長^{おさ}に……？

カスイ ワニヒコだ。

ヒメヒコ えっ、ワニヒコ！

カスイ それだけわかれば、おれがおぬしにすぐにげろといったわけがわかっただろう……あいつは、おぬしを心からきらっている。いつでも敵^{てき}と思っているやつなのだ。それが部落の長になったからには、おぬしに、どんなことをするか、このおれは心配でたまらないんだ。

ヒメヒコ (深く考えこむ) そうだったのか……。

ナギサが登場する。

ナギサ 空のようすが急にかわってきたけれど、また大風でもふくのかしら……（ふと）どうしたの、二人ともへんな顔をして？

ヒメヒコ トナカの長イシリベが死に、かわってワニヒコが新しい長になったんだ。

ナギサ まあ、ワニヒコが……新しい長に？

カスイ ヒメヒコ、おれとおぬしは小さなときからの友達だ。そのおぬしが、あのらんぼうもののワニヒコの手にかかって苦しめられるのを見るのは、どうしたっていやだ。

ヒメヒコ ありがとう、カスイ。でも、わたしはやっぱりここをはなれることはできないよ。

カスイ どうしてだ？

ヒメヒコ 米つくりがある。

カスイ だって、ヒメヒコ……。

ヒメヒコ カスイ、お前に、自分のたべものを自分でつくりだす、あのはちぎれるよろこびの心がわかったら

……。

ナギサ きっとお兄さんと同じように、あなたもやつぱりここにのこるというにちがいないわ……やわらかい土のなかに、そっとまいた小さな種子が青い芽をふき、それが日ましに大きくなって、やがてこがね色の実のりにかえる、あのそだてあげるよろこび、あれさえわかったら、すこしぐらいの苦しみをうけたって、平気だって、きっとあなたもいうにちがいないわ。

ヒメヒコ そりゃあ、昔はたしかに、わたしとワニヒコとは、狩にでてもどちらもまけずにあらそったものだ。わたしが五羽の鳥をとれば、ワニヒコはまけずに六羽のえものをねらう……でも、いまではこのヒメヒコには、そんなつまらない競争をしようという気持など、毛のさきほどもありやしないよ。

カスイ でも、ワニヒコの方では、いまでもヒメヒコを昔のようににくんでいる。

ヒメヒコ なぜ……？

カスイ おぬしもしているように、このごろはえものもすくなく、部落の分け前も昔にくらべてずっとへっ

てきた。ところが、部落を追われたヒメヒコのところには、反対に食物がふえていく。……

ナギサ それは、米のおかげだわ。

カスイ はじめはみんなふしぎに思った。でも、それがその米のおかげとわかると、部落のなかには、なんとかそれをつくってみたいとひそかに考えるものがでてきた。

ナギサ まあ、ほんとに……？

ヒメヒコ (うれしそうに) それで……。

カスイ ところがワニヒコにとってはそれはたいへんなことだ。

ヒメヒコ どうして……？

カスイ 米つくりを部落でもやるようになれば、トナカ

部落の人氣は、みんなおぬしの方にうつてしまふ。

ワニヒコはそれがおそろしいのだよ。

そのとき急に、上手の方向に「ワァー」と、かん声がある。はっとする一同。

ヒメヒコ なんだ、あの声は……？

ナギサ (上手をさし) あっ、あっちからヤリをもった人たちが！

カスイ 部落のものたちだ。みろヒメヒコ、あの先頭にたってくるのは、ワニヒコだ。

ヒメヒコ やっぱり……よし。(ヤリをすばやく手にとる)

カスイ いつかはこんなことになると思っていた。でも、こんなに早くやってくるとは思わなかった。

ヒメヒコ カスイ、お前はかくれる、お前がここにきていたことがわかれば、こんどはお前の身の上にどんなことがあがらないともかぎらない、さあ。

カスイ でも……。

ヒメヒコ 心配するなよ、このヒメヒコがそうやすやすと、ワニヒコの前にたおされるはずがない。ナギサ、お前は、家のなかにかくれているんだ。

ナギサ (心配そうに) あぶないことはしないでね、兄さん。

ヒメヒコ うん。大丈夫だよ。

ナギサは家のなかに、カスイは下手奥岩のかけにかくれる。かん声、しだいに近づく。やがて、上手からワニヒコをはじめトナカの若者一・二・三・四・五、手に手にヤリをもつて登場。

ワニヒコ ヒメヒコ、こんどイシリベのヒコにかわつて、トナカの長は、このワニヒコになったぞ。

ヒメヒコ こりゃどうも、わざわざ、そのことをつたえにきてくれたのか。

ワニヒコ それだけのことで、このワニヒコがお前のところになぞくるか。

ヒメヒコ そうだろう、わしもそう思っていた。ところで、なんの用事なのだ？

若者一 あの米ごやをやきすてにきたのだ。

ヒメヒコ なんだって、あの米ごやを！

若者二 そうだ、あののろいのこやをやきはらうのだ！ヒメヒコ なにをいうのだ！

ワニヒコ やかなければならないのだ、どうしても。

ヒメヒコ さては、ワニヒコ、お前のけいりやくだな。ワニヒコ ちがう。トナカのマツリコのいかりのなかに、ヒメヒコの米ごやをやきはらえと、祖先の霊がつたえたのだ。

若者たち 祖先の霊がつたえたのだ。

若者三 森にすむけもの、がすくなくなったのも、川のほとりの貝がかずをへらしてしまったのも、みんな祖先の霊が、ヒメヒコの米つくりをいかって、この大地の底深くかくしてしまわれたのだ。

ヒメヒコ それはちがう、まちがいだ。

ワニヒコ まちがいではない。まちがつてるのは、ヒメヒコ、お前の方だぞ。おれたちトナカのものたちには、祖先からのかたい言いつたえがある。

若者四 火をおこすことも、狩をすることも、おれたちはみんな祖先から教わった。

若者五 祖先はいつもおれたちのまわりにいて、おれたちを守ってくれるのだ。

若者一 おれたちにあたえられるえもの、や貝も、それはみんな祖先があたえてくれるものだ。